



産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN
発行所 産経新聞東京本社2020
〒100-8077東京都千代田区大手町1-7-2
東京(03)3231-7111(大代表)

産経新聞

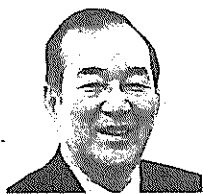
コロナ禍の抑制は、日々の生活で培ってきた国民の衛生感覚や清潔感にも大きく左右されるようだ。14世紀中期の欧州におけるペスト大流行は、その直後のパリで下水道が建設される契

が、とくに江戸時代に進化し、健康な都市生活維持のためには、塵埃と尿尿を適切に処理する知恵は誰にも必要なのだ。これを江戸時代を素材に明らかにしたのは坂詰智美氏の『江戸城下町における「水」支配』(専

す城下町の尿尿は農民に歓迎された。きちんと回収するために「雪隠」「手水場」「後架」と呼ばれたトイレがつくられる。幕府は河岸や下水の端や上に雪隠を作らぬように何度も厳しく達を出した。汚物を直接水に流すという意味で欧州の水洗トイレと同じで不潔だったからだ。流れの悪い所もあり、夏場に尿尿まじりに澱んだ下水は不衛生であった。そこで幕府は、路上や行楽地に貸雪隠を作った。有料トイレである。

歴史の交差点

武蔵野大特任教授 山内昌之



機となった。しかしいくら構造を整えても、上下の水源からさほど離れていない所に衛生処理をしない下水をそのまま流しては不潔だろう。水洗トイレといっても未処理の尿尿をたれ流す

修(大学出版局)である。氏によれば、河岸端・会所地でのゴミ焼却を禁じ、船で「永代浦」まで運ぶように幕府が命じた記録は明暦元(一六五五)年に現れている。火事の多い江戸では、焼土・焼瓦・壁土などのゴミも

るにせよ、新規参入希望者らと競争しながら江戸のゴミを処理する人びとがいたのである。尿尿処理は、衛生とリサイクルの双方で重要であろう。新田戸東郊の舟で葛西などの農村に運ばれた。下肥として尿尿の価値が高まるに従って、排泄者た

コロナ抑制に先人の知恵

る江戸住民・下掃除人(仲買人)・農民との間に争いも起きた。とくに、松平定信の寛政改革時代には、半世紀前と比べて農民が支払う契約金は3倍以上になっていたからだ。町奉行は契約金の値下げを指導しながら、江戸の衛生管理と在方の生産工場のバランスを図った。塵埃と尿尿は消費生活の必需品であるが、その利用や処理のサイクルが都市住民の生活環境を清潔に保ってきたのだ。医療従事者をはじめ現代日本人がコロナ禍に立ち向かう勇氣と使命感には、先人の苦勞と知恵も潜んでいることを忘れてはならない。(ちまつち まさゆき)